

回想的断章 I

- 『とい』 xxx のために -

松崎一平

二十一世紀がまだ、かすかな夢にすぎなかったこどものころ、
南の国の農繁休み。苗代いちごの甘酸っぱい味をおやつに、
田植えの田んぼの、そのそばの清水流るる溝でなまずをつかまえ、
学校帰りには時に堤のつばなで、時にきとんごで空腹を満たす。
中学校と高等学校は汽車通学、二つの大きな川の汽水域をこえて、
行き帰りに車中で読む本は、マンの『魔の山』や横光の『旅愁』。
背後から「菩提樹」の歌声の低く響く、圧倒的な教養のおもしろさに、
または「おもしろうてやがてかなしき鶉舟かな」、甘美な旅情に心をひかれ、
だが夢は北国の大学で学び、アフリカの大地で農業技師になること。
安田講堂の攻防には「とめてくれるなおっかさん」、無頼漢にわけもなく憤り、
『天人五衰』の作家の派手な割腹自殺には、ただただ驚くばかり。
小鹿田焼の湯飲み茶碗の肌触りと色合いに、陶器の美に強くひかれ、
いつからか日本の陶芸の歴史を学びたいと思い、大学は勇躍文学部へ、
美術史を学ぼうと入ったものの、ノン・ポリの学生の夢はあちこちし、
粹がって紫煙をくゆらせ雀卓を囲む。あげく無鉄砲にも哲学の専攻を決断し、
必修のラテン語に四苦八苦しなから、Viuamus, mea Lesbia, atque amemus!
ラテン語漬けの三年生がたたり、四年生になって他にとるべきゼミもなく、
しかたなく履修したアウグスティヌスの、『告白』のゼミが意外やおもしろく、
Quid est tempus? にしびれて、卒論は『アウグスティヌスの時間論』。
問われなければ知っているのが、問われると知らない tempus の流れのなか、
友人たちと『とい』を創刊。書きつつ考え時の関すること以来三十年、
詩を書き小説を書きつぎエッセイを綴り、ナンバーを重ねること三十号。

洛東銀閣寺近くの丘の上に始まる夢は、叡山をこえて琵琶湖の畔にたゆとい、
長い暖冬の北陸をうつろう。この冬の湿った日本海の大気はどか雪をもたらし、
重たい雪のなか *Aeneis* にあこがれ、叙事詩を書こうとキーボードを叩く。
Arma uirumque cano, Troiae qui primus ab oris...、おお、
わたしは歌う、来し方のさまざまなまよいととまどいと後悔を、
時の流れの不条理と、不条理に胚胎した抑えがたい思惟と感情との数々を。

その思惟とその感情とが間歇するたびに、さあキーボードを叩こう。

おお汽水する心の流れよ、願わくば穏やかでつつましいリズムを刻ましめよ。

(二〇一一年二月)